

マイナー競技種目への社会化
——実業団ホッケー選手に着目して——

久保和之*, 柳 承辰**, 守能信次***

Socialization into Minor Sport
——A Case Study of Hockey Players in Japan——

Kazuyuki KUBO, Sonjin YU and Shinji MORINO

Abstract

The purpose of this study was to explore the socialization process and sports careers of minor sports athletes. This research applied the "social learning theory" of Bandura (1969) to explain the socialization process. Sport role learning consists of three main elements, "significant others", "personal attributes", "socialization situations". Data for this study were collected by a mailed questionnaire to hockey team players (286 males) with assistance of team managers.

The main findings were as follows :

- 1) A large number of the players had started hockey after entering high school.
- 2) About 70% of the players had started hockey at the school sports club.
- 3) Over 50% of the players had experience in sport-transfer.
- 4) The influence of senior team members, friends and teachers was stronger than the father's influence in terms of socialization into hockey.

I 緒 言

笹川スポーツ財団の調査(1994)によれば、国民の約半数が過去1年間に何らかの運動・スポーツ活動を行っているようであるが、定期的に「ややきつい」運動強度の活動を行っている者は、僅か7.6%であるとされる。また、カナダやイギリス、オーストラリアなどでは、国民の

5人に1人が、定期的に適度な運動・スポーツを行っているのに対して、わが国では10人に1人もいない状況であり、国民の健康維持・増進を考える上でスポーツ人口を増加させることが望ましい。スポーツ人口を増加させるには、国民がスポーツに参加する機会を増やす必要がある。Kenyon⁶⁾らはBanduraの社会学習モデル(図1)を基に、人々の運動・スポーツ参加について、個人的属性「Personal Attributes」、重要な他者「Significant Others」、社会化状況

*大学院生, **研究生, ***教授

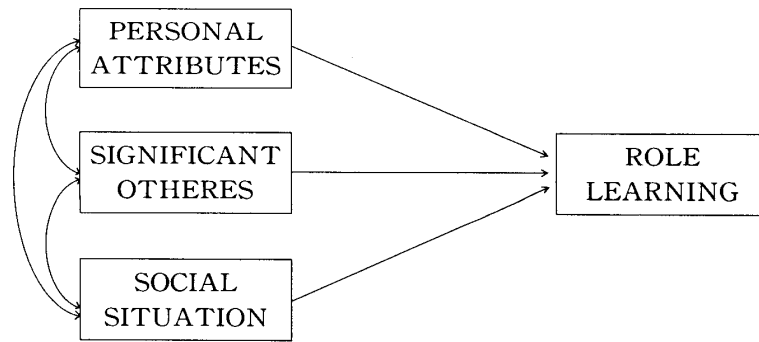


図1 社会化過程の3要素

「Socialization Situation」という3要素が相互に関連していると説明している。これまで、スポーツ参加に関連するスポーツキャリアやスポーツへの社会化研究では、水泳⁸⁾、テニス¹⁰⁾、サッカー^{3),9)}、バレーボール^{9),13)}などのメジャーなスポーツと言われている人気種目の選手が対象にされており、漕艇・ヨット¹¹⁾、アイススケート²⁾などのいわゆるマイナー競技といわれる競技人口の少ない種目に着目したものは非常に少ないのが現状である。海外では、ホッケープログラム参加者の特性について分析されたもの¹²⁾があるが、どのような要因によってホッケーを開始したかということは明らかにされていない。ホッケーは競技人口が少ないとはいえ、オリンピック種目であり、1995年度の日本ホッケー協会登録チーム数は572、登録者数は11268人となっている。

本研究において、「マイナー競技種目(以下、マイナー種目)」とは価値観を含んだ呼称ではなく、日本においてプロフェッショナルチームが存在しておらず、テレビ放映が非常に少ない種目とし、「メジャー競技種目(以下、メジャー種目)」とは、日本においてプロフェッショナルが存在しており、テレビ放映が多い種目であると定義する。

本研究では、野球やサッカー等のメジャー種目との比較を行い、ホッケー選手の社会化過程及びスポーツキャリアを明らかにすることを目的としている。

II. 方 法

調査対象は日本ホッケー協会登録の男子実業団ホッケーチーム所属選手295名であり、データの収集は1995年7月12日から16日に行われた全日本実業団ホッケー選手権大会において、出場しているチームの代表者に調査用紙を手渡し、大会期間中に回収した。また、大会に不参加のチームは、郵送法によってデータを収集した。調査内容は個人的属性、スポーツキャリア、社会化要因、活動状況、活動意識などである。回収数(率)は286部(96.9%)であった。

III. 結果及び考察

1. 個人的属性

本研究における調査対象の属性は表1に示すとおりである。年齢は、約7割が20歳代であり、次いで30歳代17.1%、40歳以上10.8%となっていた。婚姻関係についてみると、独身が66.4%、既婚が33.5%であり、子どもがいる既婚者は26.9%であった。最終学歴は高校が63.3%、大学が30.1%となっていた。

2. 開始時期

ホッケーを開始した時期についてまとめたものが表2である。最も多いのは高校時代に開始した者の53.7%であり、次いで小学校時代16.9%、中学校時代14%、入社後9.9%、大学時代5.5%であった。これによると、約半数の者が高校時代に開始しており、小学校・中学校で開始

表1 個人的属性

項目	度数(人)	%
年齢		
21歳未満	54	18.9
22～24歳	78	27.3
25～29歳	74	25.9
30～34歳	31	10.8
35～39歳	18	6.3
40歳以上	31	10.8
婚姻関係		
独身	190	66.4
既婚(子どもなし)	19	6.6
既婚(子ども有り)	77	26.9
最終学歴		
高校	181	63.3
短期大学	9	3.1
大学	86	30.1
その他	10	3.5

表2 ホッケーの開始時期

時期	度数(人)	%
小学校	46	16.9
中学校	38	13.3
高校	146	53.7
大学	15	5.5
入社後	27	9.9
N. A.	14	—

表4 ホッケーの開始機関

機関	度数(人)	%
学校のクラブ	193	70.7
スポーツ少年団	36	13.2
その他	44	16.1
N. A.	13	—

表3 メジャー種目の開始時期 (%)

	野球 n=118	サッカー n=115	バレーボール n=139	バスケットボール n=105
小学校3年まで	51.7	85.2	3.6	7.6
小学校4～6年	28.0	11.3	22.3	59.0
中学校以後	20.3	3.5	59.0	33.3

した者は合わせて約3割であった。大学で開始した者は僅か5.5%にとどまる。今回の調査対象が現在も活動を行っている選手であるため、大学卒業後に活動を中止したものが含まれておらず、実際には大学入学後に開始している者は、もう少し存在すると考えられる。表3はメジャー種目の開始時期をまとめたものであるが、サッカーや野球の選手が中学校までに活動を開始しているのに比べて、ホッケーは高校入学以後に開始した者が半数以上を占めており、バレーボールやボートと同様に後期開始型の種目であるといえる。

3. 開始機関

ホッケーを開始したときのチーム形態についてまとめたものが表4である。これによると約7割の者が「学校のクラブ」で開始しており、

「スポーツ少年団」で開始した者は13.2%となっている。「その他」と回答した者のほとんどは会社のチームでホッケーを開始しており、地域のクラブで開始したものは見られなかった。表5はメジャー種目の開始機関をまとめたものであるが、サッカーや野球の選手は半数以上がスポーツ少年団で開始しているのに比べて、ホッケー選手では約1割しかおらず、ホッケーのスポーツ少年団が少ないことが窺える。この結果は、表6に示すようにこれらの種目のスポーツ少年団の数(全国で61チーム)からいって当然の結果であるが、他の多くのスポーツと同様、学校のクラブ(課外活動)が大きな影響を及ぼしている。

4. スポーツトランスファー

現在の種目を始める前に行っていたスポーツ

表5 メジャー種目の開始機関 (%)

	野球 n=118	サッカー n=115	バレーボール n=139	バスケットボール n=103
スポーツ少年団	61.0	80.0	12.2	32.0
学校のクラブ	23.7	17.4	87.1	68.0
その他	15.3	2.6	0.7	—

表6 スポーツ少年団数

種目	チーム数	団員数
ホッケー	61	865
野球	6121	129,911
サッカー	4874	227,879
バレーボール	2893	54,524
バスケットボール	1105	73,459

注：平成7年度 日本体育協会登録数

表7 過去のスポーツ活動

項目	度数(人)	%
行っていた	183	64.0
行っていない	103	36.0

表8 ホッケー以前のスポーツ種目

種目	度数(人)	%
野球	49	26.8
サッカー	41	22.4
バスケット	11	6.0
陸上競技	11	6.0
野球・サッカー	9	4.9
テニス	7	3.8
剣道	6	3.3
卓球	4	2.2
ハンドボール	4	2.2

注：度数4以上の種目のみ掲載(n=183)

表9 ホッケーの開始要因(その1)

(%)

項目	大いに影響を受けた	やや影響を受けた	あまり影響を受けていない	全く影響を受けていない
両親	4.2	6.3	9.1	80.4
きょうだい	8.0	5.9	6.3	79.7
友人・知人	28.7	24.8	9.1	37.4
教師	17.5	11.2	8.0	63.3
有名選手	2.4	3.5	9.4	84.6
マスメディア	1.0	0.3	8.0	90.6
地域クラブ	2.8	7.3	8.0	81.8

注：パーセンテージは横にみる

活動の有無についてまとめたものが表7である。このスポーツ活動とは、体育や遊びの場以外で専門的に行っていたスポーツ活動である。全体の64%がホッケーを始める前に何らかのスポーツを行っており、スポーツトランスファーを経験している者が多い。このことは、ホッケーの開始時期が遅いこととも関連していると考えられる。

ホッケーを開始する前に他のスポーツを行っていた者のスポーツキャリアを見ると、ほとん

どの者が1種目のみを行っていたが、2種目以上を行っていた者も数名見られた。種目についてみると、表8に示すように野球、サッカーを行っていた者が多い。

5. 社会化要因

ホッケーを開始する際に、両親、兄弟、友人、教師、有名選手、マスメディア、地域クラブの影響をどの程度受けたかをまとめたのが表9である。これによると、友人・知人の影響は6割

表10 ホッケーの開始要因(その2)

項目	度数(人)	%
両親	20	7.7
きょうだい	36	13.8
友人・知人	121	46.4
教師	44	16.9
有名選手	4	1.5
地域クラブ	5	1.9
その他	31	11.9
N. A.	25	—

表11 重要な他者(ホッケー)

項目	度数(人)	%
先輩	71	25.0
友人	70	24.6
教師	50	17.6
自分	41	14.4
兄	26	9.2
その他	13	4.6
父親	9	3.2
有名選手	3	1.1
姉	1	0.4
N. A.	2	—

表12 重要な他者(メジャー種目)

(%)

	野球 n=119	サッカー n=116	バレーボール n=138	バスケットボール n=105
自分	15.1	22.4	28.3	19.0
友人	14.3	25.9	18.1	21.9
父親	39.5	12.1	12.3	13.3
兄	10.9	19.8	10.1	12.4
指導者	2.5	6.0	8.7	10.5
先輩	4.2	1.7	7.2	6.7
有名選手	9.2	3.4	2.9	2.9
母	1.7	3.4	5.1	4.8
担任	—	0.9	2.2	3.8
姉	—	—	2.2	3.8
親戚	1.7	3.4	0.7	—
近所の人	0.8	0.9	—	—
その他	—	—	2.2	1.0

強、教師の影響は4割弱の者が受けているが、その他の項目は約2割弱となっており、複数の要因の影響を受けて開始している者は少ないことがわかる。その中では、友人と教師の影響を受けている者が多く、最も影響の少ないものはマスメディアであった。また、両親や兄弟の影響が20%前後にとどまっているのは、ホッケーを行っていた家族が少ないことが考えられる。

7つの開始要因のうち、最も影響を受けた要因をまとめたものが表10である。最も多いのは、友人・知人の46.4%であり、次いで教師の16.9%、兄弟の13.8%となっている。また、ホッケーを開始する際にマスメディアが最も影響したと回答した者は皆無であり、地域クラブの影響も全体のわずか1.9%となっているように、

マイナー競技の環境的な要因は非常に影響力が低いことが窺える。

6. 重要な他者

続いて、役割学習の一要因である「重要な他者」についてまとめたのが表11である。これを見ても「友人」、「先輩」、「教師」の影響が大きいことがわかる。一方、メジャー種目の「重要な他者」についてまとめたものが表12である。これまでの多くの研究によれば、スポーツへ社会化する際に「父親」と「同性の家族」が強く影響しているとされていたが、本研究では「スポーツ種目ごとに重要な他者が異なる」という説を支持する結果となっていた。特に、ホッケーでは先輩、友人、教師の影響が強く、

マイナー競技であるが故に、部員獲得のための勧誘を行っていることが考えられる。また、「自分」と回答している者も15%近くいるが、これについては、本人が他者や環境からの相互作用を受けて自らの意志で開始した者であり、今後とも深く検討する必要がある。

IV. ま と め

本研究の目的は、メジャー種目との比較を通して、ホッケー選手の社会化過程及びスポーツキャリアを明らかにすることであった。そこで、実業団ホッケーチームに所属する選手に所定の質問紙を用いて調査を行った。その結果以下のことが明らかになった。半数以上の者が、高校入学後に活動を開始しており、小学校や中学校で開始した者はあまり見られなかった。活動を開始する機関は、開始時期とも関連しており、7割以上の者が学校のクラブで活動を開始し、スポーツ少年団で開始した者は少なかった。半数以上の者がスポーツトランスファーを経験しており、ホッケーを開始する以前に野球やサッカーを行なう者が多く見られた。ホッケーを開始するにあたり、影響を受けた要因は、友人・知人の影響が強く、マスメディアや地域のクラブはほとんど影響していなかった。ホッケーを開始する際の「重要な他者」は、「先輩」「友人」「教師」が多く見られた。ホッケーはメジャー種目と比べて、学校体育で取り扱われることやスポーツ少年団の数が少なく、ホッケーに触れる場や機会が少ないのが現状である。そのため、ほとんどが少数の高校にあるクラブで活動を開始している者が多い。また、メジャー種目とは異なり、家族の影響を受けている者が少なく、部員獲得のために「先輩」や「教師」が選手を勧誘しているようである。

今後、より多くの国民がマイナー競技に参加するためには、スポーツ少年団や地域のクラブを増設するとともに、マスメディアを巧く利用し、競技に触れる機会を増やすことが重要であると考えられる。

参 考 文 献

- 1) Coakley, J. J. (1986) : Socialization and Youth Sports, Sport and Social Theory, Human Kinetics Publishers, pp. 135-143.
- 2) 海老原修 (1989) ジュニア・スピード・スケーターのスポーツ・キャリアに関する研究, 日本体育協会スポーツ科学研究報告集 Vol. 2, pp. 191-197.
- 3) 江口潤・山本清洋 (1987) ヤングフットボラーの社会化能力, 日本体育学会第38回大会号, p. 124.
- 4) 濱島朗・竹内郁郎・石川晃弘 (1985) 社会学小辞典増補版, 有斐閣.
- 5) 飯島俊明 (1981) 一流競技者の社会化と性格, 特に性差についての考察——陸上競技と体操競技の場合——, 一流競技者の社会学, 道和書院, pp. 35-48.
- 6) Kenyon, G. S. and McPherson, B. D. (1973) Becoming involved in physical activity and sport ; a process of socialization, N. Y. Academic Press pp. 303-332.
- 7) Kenyon, G. S. and McPherson, B. D. (1986) Socialization Theory and research ; toward a "New Wave", Human Kinetics, pp. 111-134.
- 8) 久保和之・川西正志・富山浩三 (1993) 女性マスターズスイマーの社会化パターン, 日本体育学会第44回大会体育社会学専門分科会発表論文集.
- 9) 久保和之・川西正志・宮田和信・守能信次 (1995) 一流高校選手のスポーツへの社会化——種目別の専門種目に開始時期に着目して——, 日本体育学会第46回大会体育社会学専門分科会発表論文集.
- 10) 黒須充・海野孝・山田幸雄 (1987) 民間テニスクラブにおけるジュニア育成に関する研究——“クラブ育ち”と“運動部育ち”の社会化過程の比較を中心に——, 日本体育学会第38回大会号, p. 126.

- 11) 前田博子・川西正志・松下雅雄・柳敏晴
(1994) 漕艇・ヨット選手のスポーツキャリアに関する研究——競技開始年齢の遅い種目の複数種目経験について——, 日本体育学会第45回大会体育社会学専門分科会発表論文集.
- 12) Watson (1986), A Field Experiment in Socialization and Boy's Field Hockey, *Journal of Human Movement Studies*, 12, pp. 1-26.
- 13) Weiss & Knoppers(1982) The Influence of Socializing Agents on Female Collegiate Volleyball Players, *JOURNAL OF SPORT PSYCHOLOGY* No, 4, pp. 267-279.
- 14) 山口泰雄, 池田勝 (1987) スポーツの社会化, *体育の科学* 37 (2), pp. 142-148.